



駒

.

z

o

n

e

2011

2

Second

将棋短歌

[「棒銀」](#)

将棋小説

[「ピース オブ ドリーム」](#)

特集

[「恋してた！ 将棋カップル」](#)

[「恋愛五番勝負の旅」](#)

写真物語

[「お城はあきた」](#)

月子のチェス挑戦記

[「チェ的」](#)

連載小説

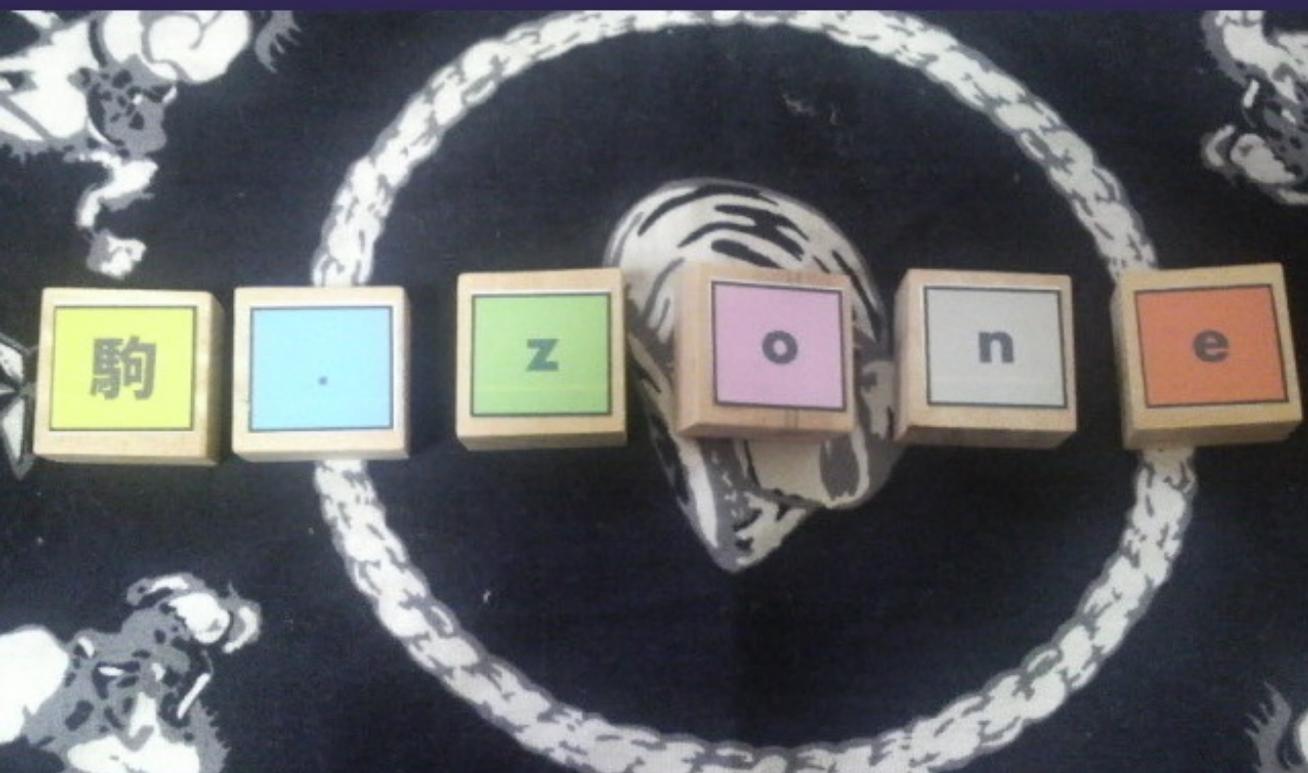
[「七割未満」](#)

[あとがき](#)

[作者紹介](#)

[リンク](#)

駒. zone vol. 2



いつだってあなたのさした棒銀はいなづまみたいに透明でした（半島）

ガラス質の憎しみ抱く少年がナイフと「銀」を隠し持つ午後（半島）

変わらないな お前も随分トシなのにその棒銀は昔のまままだ（半島）



いつまでも棒銀だけのあなたでもその攻めつけが心を揺らす（落波）

団体戦止まぬ震えを押し込めて一、二の、三で銀をつまんだ（落波）

人はいつ直進するのを諦めて右銀までも身近に置くの（落波）

「三十枚の銀貨」

時はいま 退くなどもはや許すまじ照らせ月さび銀の屍を（半島）
 棒銀に桔梗はあわく微笑むか《どかねえひかねえピピらねえ》 刺せ（半島）



「ガラシヤが自殺する前に侍女にあたえた古歌を踏まえて」

露をなどあだなるものと思ひけん我身も草に置かぬばかりを（藤原惟幹）

鋭利なる棒銀うがち問うてみよ草かかる露のあるかなきかを

（戦鬪狂棋士に送りたい短歌・半島）

第1回 火星第三地区将棋祭り

～プロロボット棋士と触れ合える、2自転時間～

火星時間51年9月5日・6日

第三地区ホテル町オクトパススクウェア交流広場
(トランスシステム・ホテル駅下車)

出演棋士

SOUFU-03名人 BONAROU八段 7KANN四段 他

イベント内容

席上浮遊対局、500面将棋、テレパシーショー、
エイリアンしょうぎコーナー、人間棋士歴史館 など

★第二地区将棋道場★

プロ棋士データを搭載したロボットが常駐
毎週火曜日はコールドスリープ対局実施中

「はい、それでは今から注意事項を説明しますねー」

目の前には百人を超える子供たちがいるが、僕の話をまじめに聴いているのかはよくわからない。僕自身この大会に出たときには、早く対局が始まらないか、そればかり気にしていた気がする。

本来なら今頃家でゴロゴロしながら、テレビを見ているはずだった。それが突然、仕事の依頼だ。担当するはずだった塚原さんが急に高熱を出してしまい、本人は這ってでも行くと言ったらしいのだが、さすがに無理そうだということで社長が病院に運搬した。今は点滴を打っているという。電話で「久慈君さ、将棋に詳しいって言ってたじゃない。お願いするよ」と言われて、あわてて会場に駆け付けた、というわけだ。

「まずは、対局前にはちゃんとあいさつしましょーねー」

まばらに「はい」と返事が。中には携帯ゲームをしている子もいるが、知ったこっちゃない。一通り説明を終えたら、あとは地元支部の方にマイクを渡す。反則やら持将棋やらの説明が始まるが、おそらく子供たちはわかっていない。僕もほとんど聞いてなかった。

そう、何年も前、僕は向こう側にいた。まだ始まって間もない頃だったと思う。すでに道場で有段者だった僕は、楽々と勝ち上がり、決勝の舞台に立った。けれども、ぼろ負けした。多くの人が観ている前で、本当に泣きたくなるほど惨敗だった。僕に勝った相手はプロになり、僕は今こうして地方タレントだ。

急遽決まったので慌てていたけれど、じっくり台本を読むとそれほど忙しくはない。プロ棋士が保護者に行くトークショーの告知をしたり、次の対局の開始時間を知らせたり。これならなんとかこなせそうだ。

大会は年々参加者が増えているらしく、特に保護者が熱心になっているようだ。うちの親は無関心だったので、不思議な感じだ。

最近是将棋のことはほとんど忘れていた。大学生の頃は、僕はトップになることに必死だった。プロはあきらめた、その代わりにアマの頂点へ。それを目指し続けて、結局それもかなわなかった。

一番純粋に楽しめていたのは、小学生の頃だったかもしれない。そんなことを思いながら、淡々と仕事をこなしていく。

午後になり、決勝戦進出の子供が決まった。子供たちはステージ裏で袴に着替える。僕は彼らを紹介するため、資料を渡され、わからないところは保護者に質問をしておかなければならない。

低学年の部一人目を確認し終え、二人目へ。

「ええと、野矢君の保護者の方は……ああ、お母さん……」

そこに立っていたのは、小学生の母親とは思えない若々しい女性だった。細身の上にそれを強調するような細くてオレンジのワンピース。髪は鮮やかな茶色で、肩のあたりまで伸びている。顔は相当の美人だが、ほりが深くて好き嫌いが分かれそう。ちなみに僕は好きな方である。というか、僕はこの人が好きだった。

「お久しぶり」

「成子……」

榎田成子。大学時代付き合っていた女性だ。そして今は野矢成子で、そして小学生の子供がいるということなのか。

「久慈君、アナウンサーしてたんだね」

「あ、ああ。他にもいろいろと」

「びっくりした？ 将棋してるんだ」

「強いんだね」

「うん。熱中しちゃって」

明らかに動揺している。僕らが別れたのは十年前。そして彼女の子供は九歳。いまさら未練があるわけでもないのに、色々と考えてしまう。

成子とは同じ歳だけれど、当時彼女はすでに働いていた。行きつけの店の看板娘を、必死になって口説いたのだ。彼女は僕のことを子ども扱いしていたけれど、交際はそれなりに順調だった。それが突然ある日、別れを切り出された。詳細なことは思い出したくない。

「久慈君はまだしてるの」

「いや、全然」

「そうなんだ。意外」

あの頃と変わらない、たっぷりと余裕のある話し方。十年の歳月を重ねて、大人の女性として完成しきった印象だ。

「ええっと、敬太君か。ちょっといろいろ確認させてもらっていいかな」

「うん」

本当は彼女自身のことを聞きたかったけれど、今は仕事の最中。子供のことについて質問をする。父親から将棋を教わったこと。学校ではほとんど負けないこと。テレビゲームはしないこと。

「なるほど」

「変な子でしょ」

「将棋の強い子は、だいたい変だよ」

成子が母親……それは不思議な事実だった。彼女はどこか浮世離れしていて、自由だった。子供のためにあれやこれやする姿は想像できない。

「ありがとう。敬太君、勝てるといいね」

「ふふ。だといいな」

袴姿の二人が出てきた。対局の準備が整ったようだ。敬太君は慣れない状況にも一切慌てることなく、堂々としたまま時間が来るのを待っていた。

僕は一足先に舞台に出る。決勝戦の持ち時間や読み上げ、記録係の方を紹介し、対局する二人を呼び込む。ちょこちょこ真ん中までやってくる姿は、とてもかわいらしかった。自分もこんな感じだったのだろうか。もうちょっと生意気だった気がする。

対局が始まると光速で進んでいく。小学生はほとんど時間を使わずに指す。途中一気に有利にできる局面もあるのだが、そんなことはお構いなし、直感と直感で二人の手が交差していく。時折考えている時間もあるが、敬太君は駒台の駒をずっと叩いていた。

あっという間に終盤だ。敬太君が優勢だったけど、まぎれ始めている。ばんばん両取りがかかって、収束が全く予想できない。そして。

「ああ、投了しましたね」

最後に王手飛車が綺麗に決まった。敬太君は負けた。ここからはまた僕の出番だ。二人に感想を聞き、表彰式を行う。

敬太君は負けても淡々としていた。ただ、左の拳が強く握られていた。悔しさはあるのだな、と思った。

続けて高学年の部も執り行われ、僕の仕事はひとまず終わった。突然の仕事で疲れたが、臨時収入が入ったと思えば気分もいい。それに、子供たちが将棋をする姿には元気を貰えた。

ただ、胸の奥で何かがざわめいてもいた。原因は、明白だ。

帰宅して駒を探したけれど、見つからなかった。どこにしまったのかどころか、引っ越しの時ちゃんと詰めたのかどうかも覚えていない。あれほど情熱を傾けていたのに、将棋はすっかり僕の日常から消え失せていたようだ。

ネット通販のページで、盤駒のセットを探した。安いものは本当にお手軽な価格で手に入るようだ。いろいろ探しているうちに、ガラスの駒やかわいいどうぶつ柄の駒まで見つかった。知らない間に将棋界もオシャレになったのだろうか。

実は、学生の時もあまり将棋界のことは知らなかった。ただただ強くなることに没頭していた。プロのことも、道具のことも、下手をすればライバルたちのこともほとんど知らなかった。将棋に関わるもろもろを楽しむ余裕はまったくなかった。

今なら。今なら、普通に楽しめるのかもしれない。趣味もなく日々を過ごすことに飽きている僕は、将棋と二度目の出会いがあってもいいかな、なんて思い始めている。

「こっちこっち」

成子は、カウンター席の一番奥に座っていた。手招きされるままにそちらに行き、隣の席に座る。

「いいお店でしょ」

「そうだね」

正直なところ店の良し悪しはわからないのだが、他にお客がいなくて静かでいいとは思った。

「そういえば、こういうところは来なかったよね」

「居酒屋ばっかだったっけ」

思い出話をするのも初めてだ。成子は、僕から逃げたのだから。

それでもあの日再会して、連絡があるような気がした。僕はアドレス帳に彼女の名前を残していた。十年間ずっと、どこかで心の準備をしていたのかもしれない。

今日の成子は、前回よりも数段魅力的だ。シックなワンピースにムートンのジャケット、そして太いボーダー柄のレギンスに、ボーイッシュなブーツ。おそらく彼女は、この格好が好きではない。僕が好きなことを見越して、コーディネートしてきたのだ。

相手によく見られたい。成子は人一倍そう考える性格だった。それは多分、今でも変わっていない。

「番号変わってなくてよかった」

「変えるの面倒だから」

「昔からそうだったよね。引っ越そうともしないし、自転車もボロボロになるまで乗って」

「そうだったっけ」

成子はマスターに、指を二本立てて頷いた。マスターも頷き返して、カクテルを作り始める。これは、いかにも常連っぽい。

しばらくして出されたのは、成子の前には青いカクテル、そして僕の前には少し茶色が勝ったカクテルだった。

「これは……」

「ネグローニ」

マスターの声は思っていたよりも高かった。なるほど、黙っている方が渋い。

聞いたことがなかった。というか、普段はビールとワインしか飲まないのだ。

「苦いけど、おいしいよ。私は好き」

成子はそう言いながら、グラスに口を付ける。どうせわからないので、そちらの名前は聞かなかった。

僕も少し飲んでみる。確かに苦くて、甘くて、少しオレンジの香りがした。好きとも嫌いとも、何とも言い難い。

「それで、頼みたいことって？」

「……うん」

僕は、単に再会を喜ぶために誘われたわけではない。僕にどうしても頼みたいことがあるから、と呼び出されたのだ。

「敬太のことなんだけどね」

「ああ」

「将棋教えてやってくれないかな」

「……え？」

完全に予想外だった。仕事のこととか、もうちょっとややこしい話とか、そういうことを覚悟していたのだ。

「あのね……私今、別居してるの」

「そう……なんだ」

「敬太を連れて家を出て……将棋教室からも遠くなっちゃったし、お金も余裕なくてさ……。でも、敬太は将棋頑張りたいて、いずれプロになりたいって言って。何とかしてあげたくて……」

「そっか」

「本当に……できるだけのお礼はするから。こういう時に久慈君に再会できたの、本当に運命だと思って」

「うーん」

運命。僕もそれを感じていたが、成子とは受け止め方が違ったようだ。彼女は完全に、母親として知り合いに頼みごとをしている。そして僕は、かつてあんなに痛い目に合ったのに、いまだに彼女に対して断ることができなかった。

「わかった。時間が合う時なら、いいよ」

「本当？ よかった」

口角をぐっとあげて笑う成子。右の頬だけに、えくぼができる。相変わらずそれは、かわいい。

「それにしても、成子の子供が将棋してるなんて、不思議な感じがするよ」

「……そうね。私もびっくり」

その後は、これまでの話をした。ただ流されるまま今に至っている僕に比べて、成子の十年間は濃密だと思った。子供ができて、結婚。義母との不和。旦那との擦れ違い。育児疲れ。別居、転職。相槌をうってはいても、実感はできない。

「ふふ、久慈君に悪いことした、罰かな」

「だろうね」

成子もてる。それは仕方のないことだ。だから成子のことを恨みながらも、僕なんかが繋ぎ止められるはずもなかった、とも思う。そもそもなぜ僕が付き合えたのか、今から思えばそれも不思議だ。だから、幸せな時間を感謝だけして、できるだけ悪いことは思い出さないようにしてきた。

「意地悪」

「知らなかった？」

平坦な日常だった。だから今、わくわくしてしまっている。それを、知られたくはなかった。

いつもは飲まない酒が、いつもとは違うところを酔わせていく。とても心地よくて、僕は笑っていた。

「じゃあ、お願いね」

「おう」

スーツ姿の成子が、玄関から出ていく。残されたのは、僕と敬太君。

土曜日、月に二度は出勤しなければならないらしい。その時に将棋を教えてもらえたら、と言われた。半分ぐらいはベビーシッターみたいなものだろう。

母親がいなくなっても、敬太君は不安な顔一つせず、僕の前に盤駒を差し出した。

「早くやろ」

長いこと将棋教室に行けず、また先日決勝で負けたこともあり、敬太君は対局したくてしょうがないという感じだ。僕は久々の実戦ということもあり、自分の実力もわからない状況。将棋を指すのが少し怖い。

が、そんなことはお構いなしに敬太君は駒箱を開け、どんどんと駒を並べている。飢えた獣のようだ。僕もつられてとりあえず並べる。駒の手触りはいい。案外いい駒を使っている、気がする。

「振る」

駒が整列するや否や、敬太君は歩を五枚取り上げ、カシャカシャと振った。歩が四枚。敬太君の先手だ。

頭を下げ、そしてあげたかと思ったらすでに初手が指されていた。一呼吸おいてこちらも指す。手が交差するようにして、次の手が指される。思わず注意したくなるが、自分も子供の時はそうだったことを思いだし、やめる。どんどん局面が進んでいくが、気が付くとこちらが有利になっていた。ただ流れに任せていただけだが、体に染みついたものはまだまだ錆び付いてはいなかったようだ。敬太君はがむしゃらに食いついてきたけれど、指せば指すほど差は開いていった。大人は、受けることを苦にしない。

「負けました」

「うーん、どこが悪かったと思う？」

敬太君はしばらく首をかしげていた。そして絞り出すような声で「銀が……」とつぶやいた。

「銀が？」

「銀が悪かったかも。金を受けていれば」

「そこじゃあ、ないよ」

彼が指摘したのは、終盤の話だ。確かに金を打った方が長持ちしただろうが、勝敗に影響はない。

「いいかい、この前負けた相手に勝つには、全国で通用するには序盤からリードしないときつい。もっと最初から気を遣わないと」

「……はい」

左の拳が震えていた。ひょっとしたら、今まで彼が対局した相手の中で、僕は一番強かったのかもしれない。僕の見立てでは、小学生の間でなら、ほとんど負けることはないだろう。ただ、プロを目指す者の間ではほとんど勝てないだろう。

「確認していくよ。強くなりたいだろ」

「うん」

「リードして逃げ切れればいいんだ。終盤は強いんだから」

その後、みっちり序盤を教え、再び対局し、その対局を振り返り、また序盤を教え……と繰り返す。気が付くと夜になっていた。

「ただいまー」

成子が帰ってきたときも、僕は将棋を指していた。敬太君は没頭していて、振り返ろうともしない。

「あ、おかえり」

「ふふ、懐かしい感じ」

成子は大きなスーパーの袋をテーブルの上にどん、と置く。その姿はまさしく母親といった感じで、少し笑ってしまった。

「本当に将棋好きなんだね。ずっとしてたよ」

「ねえ。あ、ご飯作るから待ってて」

「いや、帰るよ」

「食べて行ってよ。謝金の代わり」

言っても成子は人妻だ。後ろめたさを感じてしまう。

「お兄ちゃん、ご飯できるまで続けようよ」

「え、あ、うん」

が、敬太君が離してくれなかった。そして、僕自身が将棋を楽しみ始めている。こうなるとどうしようもない。

キッチンから包丁の音、お湯の沸く音が聞こえてくる。昔もよく成子は料理を作ってくれた。彼女は何でもできた。僕にはもったいない人だとは今でも思うし、彼女を蔑ろにする旦那はどうかしているとも思う。ただ、苦労している姿が似合う、そういうところも彼女にはあった。困難を乗り越えようとしている姿が、とても美しいのだ。

「できたよー」

さすがに敬太君もお腹はすいていたのだろう、ご飯を食べずに将棋を続けようとは言わなかった。テーブルまで走っていくと、僕を手招きする。

「さあ、食べよ」

「ああ」

家庭を持つと、毎日がこんな感じなのだろうか。きれいな妻と、元気な息子。それが現実になるような選択肢は、十年前の僕に準備されていたのだろうか。

いいや。あの頃の僕は、本当に愚かだった。成子がいるのが当たり前になって、将棋のことばかり考えていた。だから、現状の僕は、ありうべき僕だ。

「はい、手を合わせて。いただきます」

「いただきますあす」

「いただきます」

つかの間の幸せは、見せかけの幸せだ。溺れてはいけない。夢は、ただ夢であればいい。

成子の食事は相変わらず美味しく、食べているときの敬太君はかわいらしかった。そして成子は、こんなことを言う。

「やっぱり三人だと、楽しいね」

敬太君は大きく頷く。僕は、色々なものから視線をずらした。

のどがカラカラだった。頭が痛くなってきた。今すぐ逃げ出してしまいたかった。

近所でアマ大会があることを知り、何の気なしに参加してみたのが間違いだった。今の自分の位置づけなんか、知らない方がよかったのだ。こんなところでなくとも、楽しめる場所はいくらでもあったのに。

予選はあっさりと抜け、ひょっとしたらこのままいけるんじゃないか、なんてことまで思った。昔は県代表にあと一步のところだったりした。ただ、現実はそんなに甘くなく。

決勝トーナメント一回戦。相手は高校生ぐらいのすらっとした青年で、あまり闘志が感じられないタイプだった。舐めていたわけではないけれど、普通にやればなんとかなるとは思っていた。けれども、序盤からがんがん押し込まれてしまった。観たことのない指し方だったが、ひょっとしたら現在の定跡なのかもしれない。

なまじ昔取った杵柄があるばかりに、何とか持ちこたえてしまう。形勢はかなり悪いのだが、相手がミスをすればあるいは、ということであきらめるわけにもいかない。頭をフル回転させるものの、長い間使っていなかった部位はぎしぎしと音を立てながらしか動かない。指せば指すほど苦しくなってくる。早く仕留めてもらわないと、体が持たない。

投了してしまうだとか、わざと悪手を指すだとか、そんなことは本能が拒否をする。世界が回転するような錯覚の中、ようやく僕の玉は詰み筋に入っていた。あと三手のところまで指して、頭を下げた。

立ち上がり、ふらふらとした足取りで会場を後にした。自動販売機でお茶を買い、一気に飲み干す。大きく息を吸い、吐いた。

あの頃の僕とは、完全に違う。今の僕にとって将棋は、真剣に向き合うようなものではない。敬太君に教えるのが楽しくて、自分もまた上を目指せば、なんて甘いことを考えてしまった。けれども、スタートラインにすら立っていなかった。あの頃形成したものは眠っていたのではない。腐っていたのだ。

確実に弱くなっているし、強さを取り戻すには相当の努力が必要だろう。今の僕には、そこまでの情熱はない。

ぼーっと空を見上げていると、携帯電話が震えた。放っておいたが、震え続けていたので手に取る。成子からだ。

「はい」

「ママが！」

聞こえてきたのは、敬太君の声だった。

「うん？」

「ママがね、帰ってきて、たおれてて、熱いの！」

「え……風邪？」

「わからない……お願い、助けて！」

考えるよりも先に、走り出していた。自分もふらふらとしていたことなど、すっかりと忘れていた。そういえば昔も、成子が困っていれば後先考えずに行動したものだ。

敬太君が眠ると、ほどなく成子が目を開いた。

「ごめんね」

か細い声だった。僕は、首を横に振る。

「こんなことなかったから、敬太が慌てちゃって。寝てれば、治ると思うんだけど」

「ひどい熱だよ。明日、医者に行こう」

「明日は仕事が……」

「無理だよ」

付き合っているときも成子はすでに働いていて、体調が悪くても休もうとはしなかった。彼女は頑張れるだけ頑張ろうとする。そんなところも好きだった。

「……ありがとう」

「とりあえず、寝よう」

しばらくして、成子は再び眠りについた。僕は、寝室を出た。

リビングには布団が敷かれており、敬太君が寝ている。風邪が移るといけないと思い、そうさせたのだ。

この家には寝室とリビングしかない。僕は敬太君を起こさないように、部屋の隅にある椅子に静かに腰掛けた。この家には何度か来ているけれど、いまだに少し居心地が悪い。ここは、家族のいる場所だからだ。成子と僕、敬太君と僕の関係は、普通に消化できる。けれども、三人一緒にいる状況はやっぱり変だ。本来ここにいるべきなのは、夫であり、父である男なのである。

それでも敬太君は、僕に電話をかけてきた。遠くの親戚より、とはよく言ったものだ。敬太君は一切父親の話をしない。僕に気を遣ってとか、そんな風ではない。わざわざ話題にあげる対象ではないのだろう。

このままでは、色々なことがうやむやになってしまいそうだ。僕は優しいのではなく、ただ臆病なだけで許してしまう。あの時追いかけなかったのも、ただ僕が情けなかったせいだ。今も、流されるままにこうしている。昔好きだった人の役に立てれば、そりゃ嬉しいに決まっている。けれども、彼女は人妻だ。お互いに守るべき節度というものがあるはずで、お互いにそのことを考えないようにしている。

そういえば、彼女と再会するきっかけも、塚原さんが熱を出したからだった。風邪の神様が、僕に悪戯をしているのかもしれない。

彼女が元気になった時、一つ、嫌な話をしなければならぬだろう。たくさんものから逃げ続けてきた人生だから、ちょっとぐらいちゃんとけじめをつけないといけない。

「おじいちゃんの元気の秘訣はなんですか？」

「そうだなあ……」

照りつける太陽をいっぱい吸い込んだ、ビニールハウスの中。だらだらと汗が流れ落ちるが、目の前のおじいちゃんは平気な顔だ。

「将棋だな！」

「将棋されるんですか」

「へぼだけどねえ。将棋した後はぐっすり寝られるんだよ」

僕も好きなんですよ、と言いかけてやめた。話が長くなると、干上がってしまうかもしれない。

レポートの仕事は楽しいけど、時に過酷な環境が待ち受けている。今日は牛蒡を引っこ抜くこともつり橋を渡ることもないとは聞いていたけれど、まさか蒸し焼きになるとは思わなかった。

何とか仕事を終え一息つく。あとは帰るだけだ。

「久慈君、来週だけどね」

「はい」

「牛蒡抜くから」

「……はい」

来週も、頑張ろう。

あの日より、二倍は時間を使っている。それでも充分早いんだけど、成長が見られるのは嬉しい。

地元の小学生の大会。成子に頼まれて、僕は敬太君の引率者でやってきた。保護者の代理というよりは、指導者としてここに来たと思っている。敬太君は僕の一番弟子だ。

順調に勝ち上がって、今は決勝戦。序盤から有利に立ち、勝勢だった。僕が教えるようになって、敬太君は序盤の勉強をするようになった。そのことが大きい。どうしてもそれまで局面ごとに考えていたのだけれど、持っていきたい局面というものを考えることにより、随分と勝ちやすくなったと思う。

終盤の入り口、駒得に目もくれず、相手玉にまっすぐに攻め込む敬太君。左の拳が力強く握られている。

そして、あっという間に勝負は決まった。実力差はそれほどないと思ったけれど、勝負の仕方が全く違った。敬太君は、僕の教えたことをちゃんと守って、ちゃんと結果を出した。

表彰式で賞状と、一番大きなトロフィーを貰う。そういえば、僕はあれを貰ったことがない。

「よかったな」

「うん」

二人で会場を出て、玄関先で話す。子供に好かれることの少ない僕だが、敬太君は完全に気を許している。彼にとって僕は、将棋を通して関われる数少ない人間だ。子供同士なら沸き起こるような敵意やライバル心も、大人にたいしてなら尊敬の念に変わるということか。

「お兄ちゃんは、どうなの」

「え？」

「最近何かもらった？」

「.....お兄ちゃんは、もう貰えないんだよ」

敬太君が不思議そうな顔で僕のことを見上げている。そして、僕らの前に一台の車が止まった。ドアが開き、スーツ姿の成子が出てくる。

「ごめんごめん、遅くなっちゃった」

「ちょうど良かったよ。決勝まで残っていたから」

「あら、敬太、優勝したの？」

「うん。大丈夫だった」

成子が敬太君の頭をなでる。敬太君は真顔で受け流している。

「じゃあ、帰りましょう」

敬太君はさっさと後部座席に乗り込み、左の席にトロフィーを立てた。彼の座高よりも高いので、お兄さんのようである。

「倒れるよ」

「平気だって」

僕は助手席に乗り込む。行きも送ってもらったのだが、成子の運転はかなり乗り心地がいい。付き合っていたころはもっと乱暴だったのだけれど。

しばらくすると、ごとん、ごろごろとトロフィーの転がる音がした。やっぱりと思って後ろを見ると、敬太君は寝息を立てていた。

「やっぱり疲れてたんだな」

「体はあんまり丈夫じゃないの。運動まるで駄目」

「.....そうか」

成子の唇が、開きかけて、閉じた。なんとなく、飲み込まれたものは予想できた。

「似てるだろ」

「えっ」

「なぜ黙っていたんだ」

車内の温度が、急激に冷えるようだった。けれども僕は、お茶を濁すつもりはなかった。このままずるずると関係が続けていくのは、絶対によくない。

「何のこと.....」

「一緒なんだ。指すときのくせが」

「.....」

「十年前、何で.....」

「本当にどっちの子かわからなかった、って言ったら軽蔑するよね」

「.....」

軽蔑はする。けれど、理解もしてしまう。あの頃の若い僕らにとって、正しいことだけを選ぶなんて馬鹿げたことだった。僕は夢ばかり見ていたし、成子は現実を夢にしようとしていた。きっと、僕の知らない男の方が、「父親としてふさわしく見えた」ことだろう。

「相入玉、持将棋かな」

「え？」

「二人とも逃げて、知らない間に終わっていたんだ。今、新しく指し直してる」

「新しく.....」

「成子は.....もう一つ対局中だけど」

成子の肩が震えている。薄く唇を噛んでいる。そして、ちょっと笑った。

「それを.....終わらせなきゃ、だよな」

「終わらせたいのなら」

「.....始まっていたのかも、今から思うと疑問だもん」

ごつん、という音がした。敬太君がどこかに頭をぶつけたようだ。目を覚まし、何事が起きたのかときょろきょろしている。

「敬太、大丈夫？」

「.....うん」

完全に母親の顔に戻っていた。それは、僕の知らない戦いを経て手に入れたものだ。

僕は、あらゆる対局から逃げてきた。そして知らぬ間に、僕の分身が新しい対局を始めていた。僕に手の届かなかったものを求めて。

「あ」

敬太君はトロフィーを拾い上げ、胸に抱いた。その眼は、前を見据えている。僕も、こんな顔をしていただろうか。今からでも、できるだろうか。

「お母さん、プロになったらもっと大きなトロフィー貰えるかな」

「そうね、きっとね。……そうだよね、久慈君？」

「ああ」

僕らの子供は、どこまで進めるのだろうか。その言葉は、みぞおちのあたりに留めておいた。敬太君にとって、僕は他人なのだ。それは二人の大人が大人になりきれずに選んだ道の末の、歪んだ現実。僕らのわがままで、ネジを巻き直してはいけない。

不思議な三人を乗せた車が、国道を走る。外からは、幸せな家族に見えることだろう。確実なことは、不幸せでは、ない。

「先生、こっちー」

「はいはい」

土曜日の午後。成子の家に来るのは変わらなかったが、子供の数が三倍に増えていた。噂を聞いた人が、「私もできればお願いしていいですか」と言ってきたのだ。まあ何とかかなと思ったけれど、想像以上に大変だった。子供同士の対局はすぐ終わってしまうし、教え始めても集中力が持たなくて別のことをしたがるし、将棋以前に普通に目を行き届かせるだけで大変だ。

逆に言えば、いっそちゃんとした将棋教室を開いた方がいいのかもしれない。このまま生徒が増えていくと場所的な問題もあるし、ボランティアでやる域を超えてしまう。

ただ、楽しい。僕自身はもう上達とかは諦めていて、勝負に熱意を見出すことはできない。けれども子供たちに教えなきゃ、と思うと気合が入る。強い人に勝つためではなく、他人を強くするために頑張る。そんな将棋とのかかわり方は、初めて知ることができた。

「ね、おと……」

「ん？」

冷蔵庫に飲み物を取りに行っていた敬太君が、戻ってくるなり何かを言いかけてやめた。

「お兄ちゃん」

「どした」

「ケーキあった！」

「ああ、あれは三時になったら食べような」

「わかった」

どこかで……どこかで感じ取っているのかもしれない。いつかはちゃんと向き合わないといけないことだ。けれども今は先生と生徒、そして将棋を楽しむ「仲間」だ。

先日のトロフィーは、テレビの横に飾られている。敬太君は時折そちらを見て、何事かつぶやいている。彼にとって、とても大切なものなのだろう。それは、夢を実現させるための第一歩、現実化した夢の欠片なのだ。

「あのさ……あとわからないことがあるんだ」

「えっと、どこかな」

「お兄ちゃんは、お母さんのこと好きなの？」

突然の質問に、僕は全ての動きを止めてしまった。自分でもよくわからないのだ。敬太君はずっと

僕目を覗きこんでいる。

「お兄ちゃんはね、敬太君のお母さんのこと……」

そっと耳に口を近づけて、小さな声で言った。答えは、二人だけの秘密だ。ただはっきりしていることは、成子がいなければ敬太君はいなかったし、敬太君がいなければ僕は再び将棋を楽しむことはなかった。だから僕は、成子に感謝している。

指し直し局は始まったばかりだ。どんな戦型になるのかもよくわからない。

「うーん、ケーキ、食べちゃおっか」

三人の子供たちが一斉に笑顔になる。とりあえず、序盤の感触はすごくいい。このまま幸せな対局を続けたいものだ。

☆大盤を前にして

まで、382日をもちまして、後手ikkn二級の投了となりました。

それでは、先生、投了図以下の手順をお願いします。

「そうですね、『ではさようなら』という句を折り込んだ短歌が郵送で届いたところですが、ここからどうにかねばろうとしても相手が何も指してくれないことは分かっているんですね。実際にはねばったらしいのですが、手が返ってこないという厳しい仕打ちが待っていたそうです」

普通の将棋では指さない方が負けですが.....。

「この将棋は指してもらえなかったら負けなんですよ。将棋ではありませんから」
では、対局室に移りましょう。

☆対局室

この感想戦はどうやら一人のようですね。

「対局相手はさっさと帰ってしまったようですね」

おや、盤の前でうなだれてみじめなikkn二級が何か呟いていますね、心の中で。

――序盤はうまくいっていたはずだったのに。

序盤、うまくいっていたんでしょうか。

「そうですね。序盤はよくある相掛かりでしたね。お互いに飛車先を伸ばしていっていたようです。電話番号とメールアドレスを交換するところからですね。でも、将棋を指せばだいたいそういう展開にはなるんです。慰めるところではありません。角交換まではうまく指していましたね」

気になる中盤ですが。

――どうして角が打てなかったんだろう。

「交換した角が打てなかったというのは、もはやかける言葉もありませんね。敵陣に打ち込むこともなく、自陣にもすきを作らず、典型的な初心者の将棋です。一緒に行ったライブが最大のチャンスだったようですが、あろうことかツンな態度を見せてしまいました」

実際に角の打ち場がなかったようですが。

「ここでBonanzaのように果敢に角を切っていく手もあるんですよ。将棋であって将棋ではありませんから。でも、その勇気もなくうじうじしていたんですね」

開戦は歩の突き捨てからといいますが。

「どうやら対局相手は角を打ってほしかったらしいのですが、歩を突いてばかりのikkn二級にうんざりしていたようです。しまいには、突いた歩を取ってくれなくなりました。電話をかけてもつながらない。この時代はまだメールはあまり普及していなかったので、電話だったんですね」

—あの、これ以上傷口を広げるのはやめてもらえませんか。

とikkn二級はおっしゃっていますが、まだ終盤にたどり着いていませんので。

「終盤、どうしようもなくなったikkn二級は相手の飛車を攻めるという暴挙に出たわけですが、相手が攻めてほしいのは玉であって飛車ではありません。攻める方向を間違っていますね。相手の受験勉強の邪魔をしてどうするんでしょうか」

そして勘違いしているikkn二級の3六歩を見て対局相手が席を立ったまま戻ってこなくなったのですね。

「そうですね。もはや目の前に相手がいないと気づいたikkn二級がここで投了をしました」

さて、惜しくも敗れたikkn二級ですが.....あれ、いなくなっていますね。

「いたたまれなくなったのでしょうかね。我々だけで解説を進めましょう」

☆再び大盤

その後のikkn二級の対局ですが。

「そうですね。対局以前の問題です。ほぼ男子校のような電気通信大学に進学し、そのまま男子校のような大学院に進学しました」

電気通信大学には5パーセントくらい女子学生もいますけどね。

「ikkn二級に免じて対局の結果については黙っておきましょう。大学院を修了したikkn二級ですが、生来の体の弱さがたたって現在はニートだそうです」

無職ということですね。

「これでは対局は当分無理ですね」

結論が出たところでちょうど時間となりました。次ページから清水らくは三段によるノンフィクション失恋ポエム三連投です。※ みなさん、よい人生をお送りください。

(※三連投は無理でした。ポエム二作と「詰め診断」をお楽しみください。らくは)

二番目と二番目で
安定していたのに
一番目を信じて
崩れていった

盤面を挟まなかった二人
絵を描くことに夢中で
置き去りの駒たち
忘れられた勝敗

二人とも二番目は
二人とも負けで
君だけ次のゲーム
見つけていたんだ

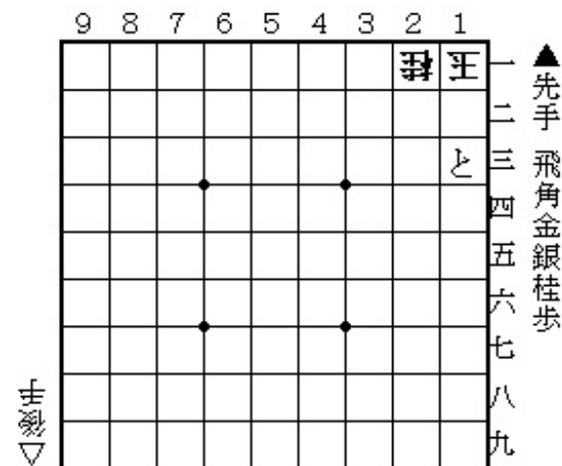
残された部屋で
並べられた駒
初手を指さずに
とにかく投了した

そもそもルールが違っていたなんて
ばかばかしすぎるけれど
欲しいものは変わらないって
それはそれで残酷

君と同じ盤上で
出逢ってしまった不幸を
棋譜から消し去って
名局に塗り替えた



問題 あなたならどう詰めますか？



▲1二金を選んだあなた

非常にオーソドックスな一手です。堅実で基本を重視するタイプ、失敗は少ないですが、個性的な仕事は向いていないかもしれません。

▲1二銀を選んだあなた

これも普通の一手法です。詰ます局面になっても金を温存する慎重さは、時に裏目に出てしまうかも。

▲1二飛を選んだあなた

一番豪快な一手です。遠慮を知らない目立ちたがり屋です。たまに失敗してしまいましたが、基本的に愛される性格でしょう。

▲2二角を選んだあなた

少しひねった一手です。まっすぐな道も蛇行して進む姿は、周囲には奇異に見えるかもしれませんが、その個性が活かされることもあるでしょう。

▲2三桂を選んだあなた

かなりひねった一手です。他人と同じはいや、目立ちたいけどセンスがあるとも思われたい、そんなあなたは信頼できる友人に助けをもらいながら生きましょう。

▲2二金・2二銀を選んだあなた

普通ですがちょっとだけ個性的な一手です。まっすぐな手ではなくずらして仕上げる癖は、たまに失敗につながります。

▲9九角△3三合▲同角成△同桂▲9一飛△2一合▲同飛成△同玉▲2二金 など長手数を選んだあなた

どSです。どMなパートナーを見つけましょう。

▲1二歩を選んだあなた

うっかり屋さんです。わざとだとしたら相当な策士です。いろいろなことに十分注意しながら生きましょう。

さて、失恋についての特集で胸を痛めた方も多いのではないかと思い、ここからは熱い恋愛のような番勝負を特集しようかと思えます。

タイトル戦を見に現地まで行く方も多いでしょうが、その土地のことがわからずに帰ってきてしまうことも多いのではないのでしょうか。そこで今回は、棋聖戦第三局までの開催地に住んでいる駒.zoneメンバーが、その土地のことをご紹介しますと思います。

第一局 6月11日 千葉県柏市旧吉田家住宅

深浦九段 90手 ○羽生棋聖





「な、なんてことしてくれるんや！ CARKEY Sはん！」 美味しんぼ風に

6月某日、放送大学の面接授業の帰りに立ち寄ったホットドッグ屋。いつものように2本注文して、駒.zoneに紹介していいか話を切り出してみる。「うちの店でいいんですか？ メガ〇ックみたいにがっかりしないでくださいよ」と笑うマスター。快く承諾してくれた。「美味しんぼにでてくる四万十川の鮎みたいに『な、なんてことしてくれるんや！』ってなってほしいですね」、究極VS至高の審査員を務める資産家・京極万太郎のエピソードだ。チェック柄の壁を見ても、置物をみても、ホットドッグがうまく食べられそうな隠れ家的な美食倶楽部……。



トッピングは無限大！
オニオン・タバスコ・ケチャップ・ピクルス・マスタード……え？ 青トウガラシ！？

この店はうれしいことにトッピングが自由なシステム！『ここはがっつりとマスタード？ いやいや、きゅうりのピクルスも捨てがたい……』こうやってホットドッグを自分色に染め上げるのも楽しみ方のひとつだ。アボカドベースのホットドッグを注文して、ガーリックチップをふりかけるのが個人的にオススメ。

「このホットドッグを作ったのはだれだ！」

写真は上から「BBQドッグ」（¥400）と「タコドッグ」（¥450）。100円チャージするとソーセージがイベリコ豚になる。自家製のパンはどっしりとした甘みがあって、ソーセージはプツリとジューシー。店長のイチオシは「幕張ドッグ」（¥400）、ぷりっぷりのエビがバジルソースで香り高くまとめられていてソーセージと合わさると凶悪なうまさだ。



CAR KEYS
 千葉県千葉市花見川区幕張町
 5-417-356 クラレ幕張105
 営業時間
 am. 8:30~
 pm. 6:00
 (日曜pm. 3:00 close)
 休業日 月曜日
 TEL 043-274-5241

「3日、時間をいただけませんか？俺がほんとうのグルメ記事を書いて差し上げますよ」

などと請負ったものの、もはや将棋と関連がないほど趣味に走ってしまった。幕張メッセの帰りに立ち寄ってくれば……と淡い期待を込める。だが残念な事にメッセのあるJR海浜幕張駅からはチョット離れている。むしろ総武線の幕張駅のほうが近いので徒歩でメッセから辿りついたらなかなかのツワモノかもしれない。(といっても30分くらいだけ)

しかし千葉に来るなら千葉にしかないお店に行きたいのが人情！うまいホットドッグを食べながら携帯で名人戦を観戦するのもなかなかCoolな将棋タイムではないだろうか。パドワイザー片手に名人の一手をあーだこーだ議論すれば、メジャーリーグ観戦っぽくておもしろいかもしれない。(文責 半島)

※今のところ携帯で名人戦は観られません(らくは)

第二局 6月23日 愛知県豊田市ホテルフォレスト

羽生棋聖 千日手 深浦九段

深浦九段 206手 ○羽生棋聖

まるぺけ

愛知県は豊田市で羽生善治と戦う深浦康市をまる一日応援続けた日

観戦愛が伝わるものを、との指令を受けたので何はなくとも愛だけはお伝えしていきたいと思います。暑苦しいです。そして暑かったです。体温よりも気温が上がりました。

愛知県民のわりに豊田市に行ったことが無く、勝手に工業都市のイメージがありました。しかし、実際は車でしか行けないような緑が深い場所にあります。



(どんどん山の中へ)



(近くに通る川も涼しげ)

こんなさわやかな場所で、どちらかといえばジックリジワジワ耐えに耐え忍ぶ感じの深浦先生が羽生先生と対局を...と思って車から降りたら、とたんに汗がどばっと噴き出して、全然間違ってますんで

した。熱い、いや、暑い。蜃気楼が見える。



ホテルの中でランチを食べようと決めていたので、ひとまず対局者のランチメニューをネットでチェックしました。ほら、二時間サスペンスで登場人物がわざとらしくご当地メニューを食べたりするじゃないですか。あれと同じ、わざわざ毎回公開してるってことは食べてね！美味しそうでしょ！という意図もあると思うのです。なので応援している深浦先生と同じものを食べようと思ったわけです。おかしくない。そんなことも楽しい将棋の現地観戦。

羽生先生が飛騨牛のハンバーグステーキで深浦先生がフィレステーキのサンドイッチ、と分かったので、ラウンジとレストラン両方チェックしましたが、なぜかメニューに無い。羽生先生ご注文の飛騨牛のハンバーグはちゃんとあるのに。美味しそうだけど食べないよ、今日は深浦先生応援だから。美味しそうだけど。

特注メニューだったか...と思って未練がましくフィレ肉のグリルがメインのランチを頂きました。ジューシーで美味しかった。



(フィレ肉とパン) (組み合わせは合ってる)

昼食後、解説会が三時からあるのでそれを待っていました。すると、周りがざわめいて「千日手」「千日手」と言っているのが聞こえてきました！千日手ということは、つまり一番最初からやり直しな

わけです。解説会が始まるこのタイミングで千日手になったことに、ちょっとお得なような、長くなるから覚悟しとけよという意味なような、ともあれ物凄くわくわくしてきました。

ところで、将棋の現地観戦の楽しみという、私の中で一番重要なのが、対局者の姿を中継するモニターです。何が素晴らしいって揺れる形勢とともに、対局者の苦悩する姿がリアルタイムで見れるところが良い。

将棋の内容が分からなくても、明らかにこっちの方が頭抱えてるなあ、苦しんでいるなあ、というのが見てとれると、ドキドキが止まりません。苦しんでいる人が良い作戦を決行して、そしていつしか相手の方が苦しんでいる。あるいは、ずっと一人が苦しんだままのときもあるし、二人ともが苦しんでいるときもある。こういうと人の苦しんでいるのが良いのか、と変なように思えますが、もう、一回見て下さいとしかいいようがありません。物凄く質の高いエンターテインメントだと思います。

しかし、とてもショックなことに、解説会場の中に入るとステージの右と左で二つモニターがあるにもかかわらず、なぜかどちらも将棋盤を上から映していました。なんということだ。これでは対局者の様子が全然分からない...

そんな中少しでも対局者を感じるものはないのかと思ってモニターを注視していたら（基本未練がましいです）扇子がバタバタとあおがれているのだけは分かることに気がつきました。将棋盤を置いた畳に落ちる影が動いている。

ところで私がかかなり熱心に深浦先生を応援しているのは、もちろんファンだからというのもあるのですが、将棋観戦ファンになった三年ぐらい前から深浦先生がずーっと羽生先生とタイトル戦で戦う姿を見てきて、その勝ちたさというよりも、負けたくなさというか、最初から最後まで執念のような情熱で勝負を投げない先生の姿にぐっとひかれるものがあったからでした。

それが去年の棋聖戦で羽生先生に三連敗されて、意外な結果にかなり残念な気持ちでいたので、今期また挑戦者になった深浦先生を応援するしか無いと思ったわけです。解説を聞く限りすごく長い勝負になりそうな雰囲気、更に、二回目の千日手があるかもとの話でした。若干クラっときたのですが、そういう長丁場にもちこんだら、もうそれは深浦先生が良いんじゃないかしら。じゃあもっとドロドロとした戦いになったらいい。ずっと見てるから...！と、そんな暑苦しいファン心理でいました。

長くなりそうな試合運びと千日手になるかもなるかもと解説者に言われながら、最初言われていた終局予想時間の七時半あたりで、やっと形勢判断が言われ始めました。本当に長い。羽生先生良いとのこと。

でもですね、ちょっと悪いぐらいが深浦先生が輝き出すシーンだと思う訳ですよ。馬だったら（なぜか馬例え）ドロドロの馬場が強い馬というか...

失礼な例えで申し訳ないです。でもそういうところが好きなんです。なので、先ほども書いたように

長引いた戦いになっている時点で深浦先生結構いいんじゃないかなあと合理的でないファン心理が働いて、前向きに応援していました。

そして15分ほどたった19時45分時点で若い解説者の判断は深浦先生持ちになりました。おお！本当ですか！解説者と深浦先生を信じる！だからがんばって！！という浮き足立った気持ちを顔に出さないようにしつつ更に無言で応援していました。（将棋の観戦は基本的に静かに行われます。ただ、たまには思う存分ワイワイ言いながら観戦したいと思うことも）

そこからが一時間ほどジリジリと攻防が続きました。扇子をバタバタと両者せわしなく動かしている影が見えました。クーラーが利いてようがなんだろうが、頭に血が上る戦いで暑いんだと思いましたし、白熱した対局だと思いました。

八時半をすぎて羽生先生がはっきりと勝ちそうです、と解説がされました。

ダメなのか、と思いつつも、じっとモニターを見ていました。手が盤上に出てきて指すかぎり是对局が続いています。すごく分かりやすい。

それから20分以上まだ指すのか、まだ指すのか、という雰囲気。でも、モニターの中で深浦先生の手が伸びて指し続けていました。

短い観戦歴ながら負けをさとした棋士が、勝負を投げる準備というか、気持ちの整理をつけながら指しだすというか、なんとなくわかる気がするんですけども、でも、その20分以上「これぐらいしか粘れないけど指すだろうか？」と解説の先生がたが言われる手を選んで行くときに、ずっとバタバタと頻繁にあおがれ続ける扇子の影を見て、まだ熱いぐらいに考え続けているんだなと、そう思ったら胸が詰まりました。

最後に、盤上に映った投了の礼の頭を見て、やっと終わったんだ分かりました。かなり呆然としました。見ているだけなのに、体力を消耗するのです。しかも、応援している棋士が負けたときには...

虚脱していたら、どうやら解説会場に対局者が来る様子。こんなに遅い時間で終わったので、来ると思っていませんでした。有り難いなあと思いましたが、ドロドロの戦いだったので、いったいどんな様子だとちょっと怖く思います。しかし、こんな機会ないぜとばかりに、どんな表情で入ってくるのか見逃さないぞと入り口を凝視します。一挙手一投足も見逃さないっ。タイトル戦を終えた直後の棋士の様子なんて現地観戦の醍醐味としか言いようがないから、良いんです。良いんです。勝った方も負けた方もじっと見るんです。

羽生、深浦の順で入って来ましたが、二人とも疲れきったように見えます。ただ、深浦先生の方が足取りが確か。羽生先生は、もう心ここにあらずな状態。暫く某然と天井を見つめて虚脱されていました。深浦先生を負かすのにエネルギーを使い果たしたのか...。コメントを求められてやっと話出せるぐらい。話す内容も、難しい、分からない、を連発されます。いや、それを制した羽生先生 凄いです...。当たり前だけど、本当に凄い。

一方深浦先生は、声が出ないです、の第一声。確かに掠れてる。胸が詰まります。でもその後に、「勝ちはどこかであったと思うし、それが見つけられなかったのは残念だけど、内容には満足しています」と、笑顔さえ見せていて、やり遂げた様子を漂わせていました。もう胸が熱くて何も考えられなかったのですが、ご本人がおっしゃる通りですよ。凄かった。良いもの見た。勝って欲しかったけど、ファンとして駄目かもしれないけど、私は最終的には勝敗よりも二人の熱狂的な戦いが見たいんだなあと実感しました。それが現地で観戦ならなお良い。これからも戦いに挑む棋士の熱さを見たいと改めて思った豊田の地の出来事でした。

第三局 熊本県熊本市水前寺公園古今伝授の間

深浦九段 114手 ○羽生棋聖 防衛

清水らくは

大盤解説会、次の一手正解者は七人と発表された。この人数ならば全員景品がもらえる。私はわくわくしていたが、なかなか名前が呼ばれない。五人目まで呼ばれたところ、すっとした男性が現れた。梅田さんだ。

というわけで、『どう羽生』のサイン本を著者からいただくという、思ってもみなかった展開に。大切に保管します(すでに読んでいた)

将棋の方は羽生棋聖が勝利して、見事防衛した。難しい局面もあったが、全体的に落ち着いていた。地元九州ということで深浦九段を応援する人が多かったが、羽生さんが強すぎた、という印象だ。会場には遠方からも人が来ているようだった。ここ最近、九州出身棋士でタイトル戦に出ているのは深浦九段しかいない。九州中の期待を背負っていると言えるだろう。ただ、それだけではない。棋風や人柄、様々な要素が期待の源になっていると感じた。

途中から、どうしても先手が勝てない流れになっていた。それでも深浦九段は粘る。誰もがもうだめだ、そう思っている局面からでも泥臭く生き残ろうとする。盤勝負は恋愛、深浦九段はそう言っていた。恋愛は美しい事柄ばかりではない。駆け引きや裏切り、打算、時には偶然が作用して、恋愛の物語は紡がれる。あきらめないこと、すがりつくこと、それも恋愛の一要素だ。五番勝負は終わりへと近づいていく。けれどもそれを認めたら、愛情は色あせてしまう。最後まで激しい想いは燃え続け、それにこたえるような羽生棋聖の華麗な寄せで、今年の棋聖戦は終わった。

深浦九段はきっとまたタイトル戦に戻ってくる。ファンならずとも、深浦将棋に魅力を感じる人は多いはずだ。また、熊本に来てくださいね。

さて。今回の対局は水前寺公園で行われた。熊本市へと観光に来れば、多くの人が立ち寄る名園だ。多くの方は熊本城とここを訪れるのではないだろうか。

で、である。せっかく熊本観光をしようと思ってもこの先がない、という場合が多いのではないか。次の日は阿蘇や天草を回るけど、今日まだ市内で時間あるしなー、どこいこっかなー、もうホテル帰ろうかなー。そういう方が多い気がする。せっかく将棋イベントで熊本にやっても、観光する場所がないのではもったいない。

そんなわけで今回私は、熊本の目立たない観光地を探し出そうと思う。ただし、普通に探したらガイドブックと変わらない。そこで「将棋を観戦に来るマニア向け熊本市観光案内」をしたいと思う。一般の方は申し訳ありません。

鉄道マニアの方へ

「熊本電鉄」

全国一千万人の鉄道マニアの方にお勧めなのが、熊本電鉄。熊本には他にも肥薩おれんじ鉄道や南阿蘇鉄道といった趣のあるローカル鉄道がある。しかしこの熊本電鉄は、熊本市のど真ん中から乗れるローカル線なのだ。

路線は街中の藤崎宮前から御代志と、上熊本から北熊本の二路線。古い車体が多く、全国でも珍しいらしいのだが、自転車を乗せられる。以前は菊池まで伸びていたが、大雨の影響で橋が落ち、復旧できなかったとのこと。その時は全国五百万人の熊電ファンが泣いた。



写真は北熊本の車庫。様々な場所からのお下がりの車体が並ぶさまは、全国百万人の古車両ファンを満足させるものだろう。

アクセス

熊本駅から上熊本駅 鹿児島本線普通電車で1駅

熊本駅から藤崎宮前駅 熊本市電健軍行で通町電停下車 北へ徒歩約5分

交差点マニアの方へ

「小飼橋交差点」

交差点には浪漫がある。

そこでは人が行き交い、車が行き交い、時には市電も行き交う。見知らぬ人々が、つかの間の関係性へと投企される空間なのである。

そんな中でも、スクランブル交差点には独特の魅力がある。方向性は自由であり、ただ時間のみが人々を縛る。

小飼橋交差点は、日本初のスクランブル交差点である。細い道が重なる五叉路は、常に多くの人や車が行きかっている。信号の切り替わりは遅く、歩行者信号が青の時間は短い。人々が何とか目的的方向へ進もうと、ぶつかりそうになりながら進んでいく。さらには同時に、子飼商店街からの車はこの時が青信号(正確には黄色点滅)であり、途切れることのない歩行者にいらいらすることになるのである。

熊本出身の芸人、ヒロシのネタに「スクランブル交差点を、行きたい方に行けた事はありません」というものがある。それを思い出しながら渡れば、魅力も倍増すること間違いなしである。

アクセス

熊本駅から 各種バスで交通センターへ 竜田口駅・大津行きなどのバスで小飼橋下車 徒歩1分

ショッピングモールマニアの方へ

「イオンモール熊本クレア」

今、日本全国には多くの郊外ショッピングモールがある。買い物をするのはもちろんだが、映画や温泉など様々なものが備わっているショッピングモールは、現代のアミューズメントパークと言ってもいいだろう。

私もショッピングモールは大好きである。平日の午前、人が少ないショッピングモールで帽子や雑貨を見ている時間は至福のひと時だ。お腹がすけばたくさんの飲食店があり、雨が降ってきても屋根があり、疲れてきても椅子がある。至れり尽くせりだ。



熊本はショッピングモール大国である。何でも人口比のショッピングモール数が日本一多いとか。そんな中でも私のお気に入り、熊本クレア。市内から湖や田んぼのわきを抜けて向かうだけでまずわくわくする。田舎の中突如現れる横長な建物は、まさに郊外ショッピングモールという出で立ちだ。

ショッピングモールは画一的なようで、ものすごく個性がある。例えば翌日福岡のキャナルシティに行けば、その違いに驚かされることだろう。ショッピングモールはその土地の様子を色濃く反映しているのだ。

アクセス

熊本駅から 各種バスで交通センターへ 熊本バスイオンモール熊本クレア・甲佐・矢部行きなどイオンモール熊本クレア下車

バスマニアの方へ

「交通センター」

新幹線も開通し便利になったかのような熊本駅。しかし熊本の本当の中央ターミナルはそこではない。

熊本駅から十数分。バスや市電で向かうその先には、中心街が広がっている。そしてさまざまな土地へとバスを吐き出し続ける、熊本交通センター。バスマニアの中には、連絡通路からひたすら出入りするバスを眺める人もいるようだ。



熊本には熊本市営バス・産業交通バス・熊本電鉄バス・都市バス・熊本バスとなんと五種類もの路線バスが走っている。それらの様々な車体がひっきりなしに行きかう様子は圧巻である。さらに高速バスも多い。熊本・福岡間はなんと一日108往復である。

私は実はバス停マニア。交通センターはバス停として観れば芸術の域に達していると思う。もちろん田舎にたたずむ、さびて倒れそうなバス停もいい。バスマニアにとって熊本は、パラダイスではないか。

アクセス

熊本駅から 各種バスで交通センター下車 市電健軍・上熊本行き辛島町電停下車 徒歩約3分

さて、いかがだったでしょうか。まだまだ紹介したいマニアック・ポイントはあるのだが今回はこちら辺で。皆さんの街のマニア向け観光地なども、ぜひ教えてほしい。

A black and white photograph of an outdoor plaza. The ground is paved with rectangular stones in a grid pattern. In the center, there is a tall, dark, cylindrical pillar. To the left and right, there are wooden benches. The lighting creates shadows on the pavement. The overall mood is quiet and contemplative.

十年後君の手元に戻るから迷わずに僕突き捨てていい

落波

駒. zone vol. 2

お城はあきた



ここから先は
「成り駒の国」らしい



無理やり
裏返されてしまった



とりあえず
入国は許可された

何か書き足しましょうか やめて

つづく

チェスを始めるにあたり、やっぱり駒の動き方からお勉強です。ルークは飛車の動きなので覚えやすいですね。ビショップはマークが+なのに動きはxなんですね……。そしてクイーンすごい……縦横斜め、27マスに動けるのでしょうか。彼女が攻撃の中心になる予感です。

駒の動き方続きです。ナイトは八方桂と呼ばれていますが、形も馬なので覚えやすそうです。キングは王将と同じなので簡単ですね。そしてポーンも歩と同じ……と思ったら最初は2マス進めるんですか！ しかも駒を取るときは斜めに。その高性能さに歩が嫉妬しています……。

そんなわけで駒の動きは確認しました。……ん、まだあるんですか？ え、キングとルークの間に障害物がないと、クロスして瞬間移動？ キャスリング？ なんか難しいですね……。この動きを見る限り、ルークは大事な守り駒でもあるようです。

さて、いよいよ駒の動きも終わ……ってまだあるんですか。ええと、2マス進んだポーンは、1マス目にこちらのポーンを動かすことにより取れるんですね。これをアンパサンと呼ぶらしいです。……アンバサはたまに飲みます。

えーと、チェスでも駒は成るんですね。ポーンが一番奥まで行くと好きな駒に変身できるようです。頑固者は「オイラは一生ポーンでいるんだいっ」と言いそうですが、そうすると身動き取れなくなるのですね……。でも、クイーンが増えると王様はたいへ……いや、嬉しいでしょうね。



さて、いよいよ駒を並べてみます。マスが偶数なので左右対称ではないですね。あと金銀がないのでちょっとキングの周りが心細いですね。ポーンを二段目に並べると、みっちり駒が詰まっていますで穴熊状態。……ひょっとして初期配置がかなり固い？

駒を並べてみましたが、初形で動かせるのはポーンとナイトだけなんですね。やっぱり「ナイトの高跳びポーンの餌食」なんですか？ 八方に逃げられるので大丈夫そうですが、やはり他の駒を生かすためにも初手はポーンを動かすような気がします。

@nyankomusumeさんに勧められたので、「ハリー・ポッターと賢者の石」観てみました。確かにハーマイオニーかわいい……。そしてこれを観てチェスを始めるにゃんこさん……。彼もきっとドS……。私も生き残るため、頑張ります！

やはり盤駒ないといけないだろうと思い、マグネットのものを購入しました。わくわくしながら並べ始めたのですが.....おかしい.....白のキングがない.....クイーンが二人います.....。水をかぶったらキングになるとか.....。交換.....してもらえますよね？

ようやくキングも届きました。これでいつでも対局が始められますね。.....あれ、対局相手がいないかも.....とりあえず三東先生にもルールを教えてくださいようと思います。

将棋と同じように、チェスにもオリジナルの用語があるようですね。初心者の私がまず気になるのは「フォーク」でしょうか。これは両取りのことです。フォークの先が枝分かれしているからでしょうか？ ポーンでもフォークできるとは、ますます歩が嫉妬しそうですね.....

チェスでは相手の駒が動けなくなる串刺しのことを「ピン」と呼ぶようですね。釘付けにしちゃうぞ、ってことでしょうか。将棋と違い合駒もないので厳しそうですね。そういえば加藤先生のあだ名が「ピンさん」だったような.....

チェスでは結構引き分けが起こるようです。チェックされていなくて動かせる駒がないと、引き分けにしてもらえるんですね。あと、3回同じ局面、は千日手に似ています。ただ、50手の間駒の取り合いがない場合.....が想像できません。残り駒が少なくなるとそうなるのでしょうか？

攻め駒の前の駒を移動させることにより、奥の駒を攻めるのをディスカバーアタックと言うようです。カッコいいですね。開き王手などに似た手筋です。誰ですか、怯えたふりして勝負になると辛いのを「ツキコアタック」と呼んでるのは.....

さて、将棋においても一つの難関である「棋譜」に挑戦します。チェスの場合白から見て左下がa1となるので、将棋とは感覚が逆になりますね。そして駒もすべてアルファベットで表わすので、ちょっと慣れるまで大変です。.....中学もあまり行っていないので、英語は苦手.....

@nyankomusumeさんの紹介していたサイト<http://www.chessgames.com/> で何局か棋譜並べしてみました。印象では、ナイトで場を荒らして、ルークとクイーンの連携で空間を支配するのが主な狙いのような気がしました。

将棋と違い金や銀といった守り駒がないので、キングの逃げ場があるかが大事になるようですね。それにしても、駒の利きが多くてなかなか感覚がつかめません。チェスも強いプロ棋士の方々は頭の切り替えがすごくうまいんでしょうね.....

ついに実戦です。ギコチェス <http://www.dawgsdk.org/gikochess/> に挑んでみました。.....完敗です。どうしてもポーンの前の駒に「紐がついている」と勘違いしてしまい、ただで取られます.....

。何とか勝てるようになりたいです。

『五割一分』

さっぱり勝てない若手棋士、三東幸典の前に突然現れた少女、金本月子。内気でちょっと天然な彼女は、とっても貧乏で将棋が強かった。

「プロになって借金を返す」ため、幸典の内弟子になった月子。師匠として、「五割以上勝つ」ことを目標とした幸典。

二人と将棋の、静かな物語。

<http://p.booklog.jp/book/9374>

twitter : tsukiko_sann

ここからは、ツイッター上でチェスが得意な@nyankomusumeさんにいろいろとインタビューしてみました。

月子 チェスで強くなるため、@nyankomusume先生に色々聞いてみたいと思います。これまでも様々なアドバイスいただいて参考になりました。初心者が心がけることとは？ 将棋の考えを生かせる点は？ 萌えるチェスプレイヤーは？ とりあえず本人の登場を待ちます。

nyankomusume(以下にゃんこ) おはよー。すいません、昨夜はずっとイカの天ぷら食べながらユリイカ読んでました。

月子 王位戦や順位戦のただなかですが、@nyankomusumeさんにいろいろ質問してみたいと思います。まずはですね.....ハーマイオニーからチェスに興味持ったと聞きましたが、途中で飽きたことなどはないですか？ 将棋もですが、勝てなかったりして途中であきらめてしまう方が多い気がします。

にゃんこ ハーたん、かわいいよねっ

月子 わ、私とにゃんこさんの会話って、気を付けないとbot作動してしまうようです.....(※ 二人ともちょっとしたbot機能搭載なのです)

にゃんこ ああっbotが先に反応してしまったw あのですね、飽きたことはないです。最初の段階で(昔のプレイヤーの)棋譜並べの楽しさを知ったせいかもしれません。それからそれから、チェスを始めてかなり早い段階で勝敗以外の部分に魅力を感じたせいもあるかも知れません。

てか、真面目に答えてもいいの？Σ(°Д°)

そうそう、気合い入れて勝ち行くチェスを始めたのは、ソムリエにchess.comに誘われてからですねー。やっぱりレイティングが動くと勝ちに行くね！勝ちに行くっていうか、引き分けに行くけど！(※ ソムリエとは将棋の序盤に大変詳しい方の愛称です)

あと、関係あるのかないのか知らんけど、賢者の石と秘密の部屋(のハーたん)は、何回観ても飽きないね。

月子 ありがとうございます。にゃんこさんが守りたいキャラの範囲内で答えていただければ.....。たとえば『鏡の国のアリス』などは読まれましたか？ チェスに関する物語では有名なものだと思うのですが。

にゃんこ チェス始める前に読んじゃってたんですよ(;´Д`)。チェス開始後に改めて角川つばさ文庫のやつを『表紙買い』しました。

「鏡の国」について言うと、あれってアリスが女王になる話なんですよ。チェスというのは普通の女の子のポーンが、やがてスターになる(プロモーションする)になる物語を内包しているので「

鏡の国」は正しくチェスの話だと思いました...ニャ。

ちなみに、にゃんこは頭がおかしい時にはビショップのことを「黒マス美少女」「白マス美少女」って呼ぶんだぜ！

秘密の部屋の時のハーマイオニーで「鏡の国のアリス」映画化すれば良かったのに！

月子 なるほど、奥が深いですね。『五割一分』を読んで将棋に興味を持つ人なんかもいたらなーって思うのです。あ、そうそうチェスでは「観るファン」層というのはいるものでしょうか。プロの対局が中継されたりだとかは。

にゃんこ ヨーロッパでは、ごく普通にスポーツしない人でもスポーツ観戦する、という文化が根づいていて聞きますね。ルールだけなら誰でも知ってるとか。どこの家にもチェスセットの1つくらいあるよ的な。

にゃんこも特にファンではないけど、気が向けば野球観戦しますが、これって「観る野球ファン」かという微妙だな。

twitter見ると「観る将棋ファン」というより「棋士を観るファン」的な人が増えてる希ガス対局中継は毎日のようにありますよ！トーナメントプロの公式戦の棋譜は全部タダで手に入る世界ですし。

あと、にゃんこむすめはハーマイオニーを観るチェスファンなので、そこんところ間違えないように。

月子 観るファンの話はK-1が人気だった時に近いかも、と思ったり。いろいろと答えてくださり感謝です。また後日うかがうかもしれませんが、今日のところはここまでにします。ありがと.....ニャ。

月子 ああ、そういえばまだ質問があるのです。チェスをしてみて一番勘違いするのが「ヒモ」についてで、特にポーンの前の駒をただでよく取られます。このあたり、慣れるコツなどありましたら是非教えていただきたいです。

にゃんこ あー、これね。「ヒモ」というか、要するにポーンは前に進めるのに前方への攻撃ができない、というのが意味不明って言われたことがあって、まあそれと似てますね。前に進めるけど攻撃はナナメだけ。それは何故か？どうしたらその感覚を掴めるか？

連想してください。1.チェスの駒=甲冑を付けて盾持ったお姉さん。2.ポーンたん=ツインテ美少女。とてもかわいい。ふわりふわりしている。3.ツインテ美少女はてくてく歩くけど、弱っちいので相手の盾をつついても全然勝てない。

4.でも甲冑は脇の下が空いているので、そこにツインテを侵入させてくすぐり攻撃ができる。何だそのツインテ、メデューサかよ！って話ですが。いや突っ込むのはツインテじゃなくてポーンたんが持ってた槍とかでもいいんですけど。

...てな感じに妄想しながらチェスをプレイしていれば「前にすすめるけど攻撃はナナメだけ」のポーンたんの属性に慣れるかも、と思うの。慣れるというか萌えると思うの。萌えが判れば「ヒモ」の方も感覚が掴めるんじゃないかなあ。結局チェスってのは萌えなんですよ。

いい事言った気がしてきたからもう1回。「チェスは萌え」終末論とかダリとか関係ねえ！（え？

月子 ありがとうございます。なんかポーンに親近感がわいてきました(?) 私の髪もそのうち動くように.....はなりません.....。もう少し実戦を積んで、感覚を磨きたいと思います。

次号では、にゃんこさんに指導対局していただこうと思っています。その時は特別ルールが採用されることと思います。ぜひ楽しみに！

.....負けた。

勝負事なので、負けることはある。けれども、この負けはダメな負けだ。相手は五連敗中で、今期まだ勝ちのない先生。将棋の内容もこちらが押ししていたのに、中盤から乱れまくってしまった。こんな負け方はプロになってから記憶にない。ひどい。

控室に寄る気にもなれなくて、すぐに会館を飛び出た。こういう時に、何をすればいいのかわからない。カラオケもゲーセンも無縁で、愚痴を言う友人もおらず、隠れて酒やたばこをやるわけでもない。ただもやもやした感情を抱えて駅に向かい、気が付くと反対方面の電車に乗ってしまっていた。

いっそこのままどこかに行ってしまうか。ただ、その後のことが浮かばない。次の駅で下りよう、そう思った。

「辻村先生？」

「あ.....」

同じ車両に乗っていたらしく、こちらに歩み寄ってきた女性。同年代でつい最近女流棋士になった、木田桜女流2級だ。いつもおとなしくて、あまり他人とべたべたするところを見たことがない。そういうところは俺に似ているかもしれない。ただ川崎とは小さい時からの付き合いらしく、たまに親しげに話しているところを見かける。

「今から帰るの」

「あ、はい」

「私も」

同業者に会ってしまったがために始まる、義務的な会話。とても苦手だった。しかも今は、気持ちが混乱している。とはいえ、無視するわけにいかない。

「木田さんは？ 対局ですか？」

「はい」

「勝ったんですか？」

「はい」

「それは良かった。ずっと勝ってるんじゃないですか？」

「負けるわけには、いかないから」

冷たい目をしていた。胸をえぐられる気がした。木田さんは、将棋に勝つことを使命のように考えている。俺より一歳上、奨励会の試験に落ち、苦労してようやく女流棋士になった。ほっとしてしまっただとしても不思議ではない。けれども、全くそんな雰囲気はない。まるで女流棋士の中では勝つのが当たり前だと言わんばかりの、力強さを感じる。

「あ、ここなので」

「うん。また」

居づらくなって、二つ目の駅で下りた。ベンチに腰かけて、しばらくぼーっとしていた。

「何でやめるの？」

予想外の反応だった。てっきり喜ばれると思っていたのに。

「その、全然授業出られていませんし、このままずるずると在籍するのはいけないと思って」

「でも、高校卒業ぐらいしといたほうがいいんじゃないの」

「はあ」

「成績は出すよ。進級もできるんじゃないかな」

「え、それは……」

「プロ棋士がいるっていうのは宣伝にもなるしね。細かいことは気にしないでいいよ」

「……」

敗北が続いているようだ。俺は学校をやめることさえできないらしい。

久々に着た制服は、コスプレをしているような気分させられる。まったく愛着のない校内を、ふらふらと歩く。高校生たちとすれ違っても、他人としか思えない。彼らは、勝負の世界に住んでいない。

このまま所属だけして、進級して、卒業して。俺が手に入れるものとは何だろうか。そしてその代わりに将棋で得られるものとは何だろうか。

そういえば、つっこちゃんは学校に行っているのだろうか。なんとなくだけれど、行っていない気がする。彼女には何かに所属している、という雰囲気がない。

多分、俺は憧れているのだ。自分が持っていないものを彼女は持っているのだと想像して。

ただ、彼女がプロになれないならば、その憧れも霧散してしまうだろう。俺はあくまでつっこちゃんを女の子として見ている。それがライバルになるときが来るとしたら、感情はこんがらがってしまうかもしれない。

教室には入らなかった。そこには、求めているものは何も用意されていない。微睡んでいる時間もない。俺は、学校を出た。二度と来ないかもしれない。

「……え」

思わず声が出てしまった。仕方ないと思う。

「何」

「いや、何って……」

俺の前に現れた皆川さんは、金髪になっていた。首元にはネックレス、左腕には高そうな銀色の腕時計、そしてタイトなミニスカート。年齢的にはそれほど特別じゃないかもしれないし、似合っていないというわけでもない。ただ彼女は女流棋士であり、そして今から大盤解説会なのである。

「それより、今日はちゃんとしてよね。あんた、たまに早口で何言ってるかよくわかんないんだから」

「……はい」

きついことを言われているが、そもそも今日は解説者として来たのではない。近くでタイトル戦をしているので見に来たら、立会人の先生が二日酔いで、対局開始直後はトイレにこもっていて、連絡がつかず「迷子」になっていたらしい。

そんなわけで先生がするはずだった分の解説は俺が引き受けて、先生には立会に集中してもらうことになった。集中できているのかは謎である。

一応高校生なので、平日にこういう仕事を頼まれることはなかった。けれどももう、周囲には「やめました」と言っている。しばらくはやめるための手続きを考えることすら面倒だろう。

二人で控室に入る。すでに局面はかなり進んでいた。定家先生の方が指しやすそうだったけれど、差がついている、というほどではない。まだまだ長くかかりそうだ。

「お、夫婦で来たね」

「な、何言ってるんですかっ」

まだ酔っぱらっているのだろうか、立会の出口先生はとても機嫌がよさそうに軽口を言っている。

「まあ、夫婦ではなく兄弟弟子ですね」

「辻村君は冷静だなあ」

奥には、継ぎ盤が並べられていた。副立会人、解説者、記者などでかなりわいわいと局面が突っかかっている。そしてその中に、川崎さんの姿もあった。チェックのシャツを着ていて、見た目は奨励会員の時と変わらない。というか、考えてみたら川崎さんも学校をさぼって来ているんじゃないか。

「お疲れ様です」

「あ、辻村。大盤行くんだってな」

「川崎さんも来てくださいよ。俺は早口だって苦情が来てるんで」

「あー、嫁さんからだろ」

よくわからないが夫婦というネタが広まってしまっているらしい。参った。

「まあとりあえず、なんかあったら手伝ってくださいね」

「わかったよ。で、どう思う？」

「まだ先は長そうですね」

「そうだな。でも、定家先生苦しくしちゃったよな」

思わず検討中の盤面を見た。特に間違っていない。どう見てもまだ互角、どちらかと言えば定家先生有利の局面だ。

「……そうですかね」

「あれ、辻村は先手持ち？」

「持ち、というか……こんなもんじゃないですか？」

「大雑把だなあ」

釈然としないものがあったけど、気にしていても仕方がない。川崎さんの前に座り、検討を始める。

「これぐらいですかねえ」

「それは損だよな」

「端を突くと」

「こっちの方が価値高くない？」

なんとなく、波長が合わない。元々棋風などは違うのだが、それにしても意見が合わないというか。

「皆川さんはどう思う」

「え、私？」

「やっぱり定家さん、苦しそうだよねえ」

「え、いや、えーと……」

皆川さんも困っている。やはりそれほど差があるとは感じていないのだろう。

「あ、時間だ。行きましょう」

「うん」

何となく困惑したまま、二人は解説会場に向かった。川崎さんの実力は知っているけれど、だからと言って全面的に信用しようとは思わない。なんとなく、彼には感覚が跳躍したようなところがある。それが強さの秘訣かもしれないけれど、弱点でもありうる。

会場はすでに満杯、熱気が伝わってくる。最近は本当に、観戦を楽しみにしているファンが多いと感じる。

次の一手クイズの抽選を終え、現局面について解説を始めた。自分の感覚を信じて、定家さん有利を進めていく。先手は玉が薄いものの、要所要所を押さえているので簡単には攻められない。

皆川さんは質問を引き出すのがうまい。たぶん、本当に疑問に思っていることを聞いているのだろうけど。無理にひねり出された質問は、どうにも答えにくい。まだまだ技術不足なのだ。

「具体的にどうしましょうか」

「そうですね……」

模様はいいはずだ。ただ、どの手順で、と言われると難しい。有効な手待ちも難しく、攻めも守りも安定しているのに、有利に持っていくのが大変そうに思えてきた。

笑顔を手掛けるものの、内心焦っていた。こんなことがあるのだろうか。現在の形がいいばかりに、どの手も悪手になってしまうかもしれないという理不尽。相手は指したい手が多くあり、手待ちしてくれるのは大歓迎だろう。

川崎さんは、どこまで見越していたのだろうか。

とはいえ、定家さんは最強の棋士だ。俺らに見えていないものが見えているのかもしれない。そん

なこと言っていては解説が成り立たないのだけれど。

「なかなか難しいということでしょうか」

「そうですね、はっきり有利にするとなると」

皆川さんの唇が、少しとんがっている。不満があるときのくせだ。まあいつも不満だらけという性格ではあるのだけれど、その中でも特に目の前に解決してほしいことがあるとき、こんな顔をする。

確かに、自分でも納得のいく解説はできていない。しかし、わからないのだからしょうがない。

「皆川さんならどうしますか」

「えっ」

「ぜひ鋭い読みを」

ためしに振ってみたら、唇の端をぴくぴくとさせている。これも試練だと見て見ぬふりをする。

「あの……」

「皆川さん、結構こういう局面で鋭い直観とかありますもんね。どうですか」

「辻村さんにわからないものは……わからないなあ」

結局皆川さんも新しい発見はできず、消化不良のままタイムアップとなった。それほど難しい将棋を皆様でお楽しみください、としか言いようがない。

そして、会場を後にするとき、固いヒールが僕の足を踏んづけていった。

今日は土曜日。毎日学校を休んでいる自分にとっては休日も何もないのだが、土曜日というのは特別な曜日である。奨励会があるのだ。

プロになる前、奨励会前夜はひどく緊張した。どれだけ実力が上がっていても、明日負ければずっとプロになれない、そう考えると眠れなかった。順調に昇級してはいたけれど、プロになれずに足踏みしている先輩たちの姿は俺を焦らせた。一度停滞してしまうと、なかなか浮上するきっかけがつかめない。そんな様子を目の当たりにして、とにかく駆け抜けなければ、そう思っていた。

川崎さんに追いついてしまったことも、焦りの原因になった。あの川崎さんが上がれない三段リーグとは、どれだけ恐ろしいところなのか。自分が通用する場所なのか。リーグ戦前夜に安眠した記憶は皆無だ。

プロになってからも、その後遺症がある。例会前夜はそわそわとしてしまう。そして当日になり、どうしても会館に足を運んでしまう。自分はまだ三段で、四段になった夢を見ていたのではないか。七割とか言う勝率は、願望が生み出した幻なのではないか。そして会館に到着し、自分の対局すべき席がないのを確認して安心するのだ。

今日も俺の席はなかった。それを確認して、外に出る。張りつめた空気に対しての礼儀というか、奨励会の対局が始まると会館にいてはいけない気がしてしまう。俺よりずいぶん先輩の人たちが、たくさん残って戦っている。四段になれるのは年に四人か五人。毎年優秀な若手が上がってくるし、どう考えてもプロになれない人が何人も出てくる。強い人から順に出ていけるというようなシステムではない。どれだけ安定して勝っていても、上位二人に入らなければ意味がない。半年の間爆発的に力を発揮できる人、そんな人がプロになれるのだ。

七割勝っても安心できない。ある意味彼らは、プロよりもずっと厳しい競争をしている。運よくすぐに抜け出せた自分には、活躍する義務があると思う。自分より弱い奴がプロになった、とは思われたくない。思わせてはいけない。

「あ……おはようございます」

か細い声が、後ろから聞こえてきた。振り返ると、つっこちゃんがいた。

「おはよう。今から対局でしょ」

「……はい」

今日もツインテールがかわいらしいつっこちゃんだったが、顔色がよくなかった。目も少し泳いでいるように見える。

「どうしたの？ 体調が悪そう」

「いえ、そんなことは……ただ……」

「ただ？」

「まだ慣れなくて……私その……学校とかほとんど行ってなかったし、こういう人が集まる場所とか、ちょっと……」

今にも泣きだしそうだった。俺が緊張していたのとはちょっとわけが違う。つっこちゃんは、そもそも人間が苦手なのだろう。理由はわからないけれど、そういう人間がいることは知っている。

「人だと思わなければいいんだよ。ただ、将棋を指す。とりあえずはそれだけを考えれば」

「……はい。……あ、ありがとうございます」

「うん。頑張ってるね」

ちょこちょこと走り去っていく、つっこちゃん。勝負の世界で生きていけるようには、とても思えない。けれども彼女の生み出す棋譜には、まぎれもない魅力がある。才能をどこまで生かせるのか。どこまでこの世界に耐えられるのか。

思い出してみれば、自分だってすぐにここの雰囲気慣れたわけではない。彼女もいずれ、作り笑顔で乗り切れるようになるかもしれない。俺が少しでも、手助けできるならいいけれど。

会館を後にする。心の中でつっこちゃんを応援するものの、漠然とした不安も残っている。彼女はプロ棋士になりたいのだろうか。わからない。とりあえずこの疑問は、保留しておくしかない。

「辻村……ちょっとお願いがあるんだけど」

「ん？」

突然かかってきた電話。皆川さんの声はいつになく暗かった。

「なんですか」

「今度……竹籠杯に出ることになって」

「たけかご……？ ああ、あれか」

竹籠商店街杯。若手の女流棋士やアマチュア、奨励会員がトーナメントで戦うインターネット棋戦だ。商店街がスポンサーということで去年話題になっていたが、無事第二回が開催されるということのようだ。

「それで、絶対負けたくないの」

「はあ」

「だから……その……教えてほしいんだよね」

「はあ」

「ちょっと、何よそのやる気のない返事」

「いや、別に将棋のことならいつでもいいですよ。竹籠杯とかじゃなくても、どんどん強くなりましょうよ」

「……う、うん、まあとにかく、至急なの！」

「じゃあ明日します？」

「え？」

「明日うち来てくださいよ。みっちり研究しましょう」

「……あ、えーと、わかった」

皆川さんがここまでやる気を出すのも珍しい。よほど竹籠杯にかけているのだろう。連盟のページで、参加者を調べてみる。若手女流たち、アマ名人の小柴さん、学生代表の額田さん、そして奨励会代表、金本3級。

なんとなく。何となくだが、皆川さんは彼女たちに負けたくないのだろう、そう思った。そして俺も、皆川さんには勝ってほしい。つっこちゃんの活躍にも興味があるけれど、女流プロとして、皆川さんの意地を見てみたい。

部屋の中を見回す。たいして物はないけれど、人が来るというなら整理した方がいいだろう。この

部屋に誰か訪れるというのは、初めてのよな気がする。

よく見ると、カーテンの下に埃が溜まっていた。カーテンを思い切り開ける。光が差し込んできた。明日まで、開けっ放しにしておこう。

<つづく>

なんとか完成しました、第二弾。

vol.1では多くの感想をいただくことができました。予想以上の反響、大変嬉しかったです。

そして、大きなニュースもありました。某バンドの期間限定復活です。十年後の夏は、本当にやってきたのです。

駒.zoneは、「なんとなく面白いことを、とにかくやっちゃおう」と思ってます。これまで将棋を楽しむのは、ほとんどが「指すこと」とイコールでした。そんな中観るファンが増え、こどもに付き添っている方も引き込まれ、漫画や小説でも楽しめるようになってきました。将棋もクリエイトもアマチュアである私たちが「新しい楽しみ方」を模索したっていいじゃない、と思うのです。

将棋に関わっていて悲しいのは、ファンが去っていく姿を見ることです。いろいろな楽しみ方があるといい。その中で駒.zoneが何か役割を果たせたら、と思います。

作者紹介

清水らくは(落波) 小説・詩・短歌・写真物語・観戦旅行記

大風呂敷を広げた結果、今回もひーひー言いながら書きました。指す方は最近さっぱり。「指す＋書く＋鑑賞する」のトライアスロン将棋競技とかあれば上位入賞できるかも……などとどうでもいい妄想をする日々。

半島 短歌・旅行記

グルメレポーター見習いのはんとうーです。短歌の人と思われがちですが、ただの皆川さん信者です。ニーソは月子さんじゃなくて皆川さんのものでよろしく。家事をしない押しかけ女房という新しいジャンルに立ち向かう金髪でグレ気味の横恋慕残念少女に愛の手を。

……真面目な事を書きますか（笑）

前回の短歌は破調、句またがりなど御法度的なものを多用しておりましたが（将棋で言えば飛車角落ちの上に2歩を解禁した状態）、今回はすこしだけ真面目っぽいものや、古典もどきも書いてみました。とりあえず月子さんに対抗して皆川ファンクラブを作ります。

まるぺけ 表紙・観戦旅行記

表紙と暑苦しくて偏った将棋観戦愛を語ってしまったまるぺけです。浴衣の爽やかな月子さんに免じてお許し下さい。ところでこの月子さんの髪ですが、貧乏パーマ（三つ編みにしてからほどくことによって作り出すパーマのようなもの）という設定になっております。浴衣その他小物は駒.zone編集部からの支給品です。明日もがんばれ月子さん。ところで皆川さんが金髪になったと知って動悸が隠せません。明日もがんばれ皆川さん。

nyankomusume チェス指導

『「ハリー・ポッターと賢者の石」を観てチェスを始めた人の会』名誉会長のにゃんこむすめです。会員は随時募集中です。月子さんがチェスに本腰を入れ始めたとのことで喜ばしい限りですね。将棋が強い人ですからコツさえつかめればチェスもすぐ強くなると思います。基礎的な知識はハリー・ポッターの映画で判るのでDVDを繰り返し観て、ハーマイオニーをいっぱい愛でて欲しいと思います。ちなみに一番かわいいハーマイオニーは「秘密の部屋」です。参考にしてください。…というか月子は実は腹黒いという噂があるので怖いです。辻村君も気をつけた方がいいと思います。実はとっくににゃんこむすめを凌駕する実力を身につけていて、実戦でケチョンケチョンにしようとか企んでいるかもしれません。まあそれはそれで全然構いません。いっそのことチェスに転向して世界に羽ばたく月子の活躍もみてみたいですね！

ikkn 感想戦

本業は本文中にもあるように無職。ですが、勝手にウェブ上に「総合先端研究所」という私一人きりの組織を立ち上げまして、そこの主任研究員だったりします。音声認識関連の研究をしています。

目指せ世界一。

駒.zone vol.1

<http://p.booklog.jp/book/18766>

駒.zone 特設ページ

<http://rakuha.web.fc2.com/komazone.html>

明日こそジンジャーティー

<http://p.booklog.jp/book/22197>

レイピアペンダント (木田・川崎)

<http://p.booklog.jp/book/18766>

五割一分 (辻村・皆川・金本)

<http://p.booklog.jp/book/9374>

twitter ID

月子さん tsukiko_sann

清水らくは rakuha



駒 zone vol.2

編集 清水らくは

表紙 まるぺけ

広報 金本月子

執筆 半島 ikkn nyankomusume